

毛沢東を敬慕させ、出版さし
とめまでさせたといえられる江
青の伝記が、毛沢東が死に、江
青も失脚したあと、遂に出版さ
れた。江青評伝を待きつつある
私にとって待望の書だが、一般
読者にとっても、現代史の当事
者が語った内幕として
見逃せないだろう。

江青には、淫気女優、
革命の闘士、裏切者とい
う三つの評価がある。毛
沢東の妻は元女優で……と
言われていたのが文革で
古参の闘士と評価が変わ
り、失脚後はあわれブル
ジョア階級の手先にされ
てしまった。スノーに自
伝を語って世界的に有名
になった夫に見習い、毛
死後の権力継承に備えて
江青がウイトケ女史に口
述した自伝なので、本書
は「闘士」江青の伝記に
なっている。

毛沢東を敬慕させた部
分は慎重に削除されてい
るようだが、数々の新事

興味深い政治的自伝

一九三三年二月青島で入党、紹
介者は李大釗である。この夏上
海へ行き、翌年八カ月も国民党
に投獄された。女優として劇と
映画に出演するが、党の文芸有
力者（周揚、田漢、陽翰笙、夏
衍ら）に迫害され、やがて文革
で復讐する。「青島」も
「江青」も自分で選んだ
名である。毛との結婚で
積極的だったのは毛の
方、毛との間に生んだ娘
は李訥一人で、李訥は前
妻賀子珍の娘を養女にし
たのである。五〇年代は
病気がちで何度もモスク
ワへ行き、子宮ガンなど
の治療を受けたが効な
く、遂に病気を意志力で
克服して文革を發動す
る。一九六九年に林彪が
毛江夫妻の毒殺をはかっ
た、など。

政治的自伝だから嘘や
誇張が混っているが、嘘
は嘘なりに興味深い資料
だし、文革を生耳った江
青の談話は中国現代史の

ロクサーヌ・ウイトケ著



④ ⑤

舞台史を解明
するヒントに
満ち満ちてい
る。最後に、
ローマ字の固
有名詞を漢字

の
一
は

に復元する職業を短期間になし
とけた訳者たちに敬意を表す

一九四四年三月誕生、幼名李

る。中嶋嶺雄・宇佐美滋訳

進、小学校以降は李雲鵬。父が

（パシフィカ・各一四〇〇

乱暴者で母と反出し、二人で辛
酸をなめて叛逆児として成長し
た。満州事変で抗日に目覚め、

帝塚山大学教授 伊原 吉之助

R・ウィトケ 著

江青

上・下

1,147p

中嶋 嶺雄・宇佐美 滋 訳

本書は毛沢東夫人江青の激動の生涯を、本人との六十時間にわたる直接インタビューを基にしてまとめあげた伝記である。江青夫人は上海の左翼映画女優から、一躍、毛主席夫人の座にすわり、文化大革命では、現代革命劇の育成につとめただけでなく、現代の「則天武后」として絶大な権勢を振るった。しかし、毛主席が死去すると、一転して「反革命」の烙印（へらく）を押しつけて失脚し「四人組」の一人として激しい批判キ

ャンペーンにさらされている。著者のウィトケ女史はアメリカの若い中国研究の婦人学者、中国の婦人問題について書かれたインタビューを申し入れた、千載一遇のこの会見の機会をものにしている。インタビュー

夫の毛主席がエドガー・斯诺によって全世界に紹介されたように、彼女も女権運動家でもあるウィトケ女史に、女としての生い立ちと苦しみ、革命への情熱を打ち明け、これを広く世界に知らせてもらいたいとの衝動にかられたようだ。この企ては、毛主席の怒りを買い、出版にも中止するよう圧力が筆者に加えられたが、このことが逆に

筆者に出版の決意を固めさせる結果となったという。今日、江青夫人には、公私にわたってあらゆる非難、攻撃があびせられているが、全く抗弁の機会が与えられていない。彼女にも彼女のいい分があること、この伝記は示している。もっとも伝記の常として、自己賛美と都合の悪い面は語らない、という欠陥がある。また著者がき

わものをねらわず、あくまでも歴史として書こうと意識するあまり、叙述が抽象的にすぎたり、難解だったりしている。しかし、従来の江青伝記にも文獻や伝説に基づき、実証性に乏しいのに対し、江青夫人自身が語ったという点だけでも、歴史資料としての価値は高い。女の目を通して見、女が主役のユニークな「中国革命外史」というべきであろう。

夫人自身が語った心のうち

(パシフィカ社・各二、四〇〇円)

中国ではこの一年、文革中の生
 産の停滞や政治的混乱は、最大級
 の愚は(囂)を伴って「四人組」
 の責任に帰せられてきた。「四人
 組」の極端な政治主義や、その革
 命護教論が宗派的陰謀(特に毛主
 席に死が迫った時期)にまで発展
 した状況が、生活者にとってうん
 ざりするものであったであろうこ
 とは容易に想像がつく。それにし
 てわれわれは、あまりにも事実に
 知らされていない。林彪が毛夫妻
 に毒を盛ったとか、王洪文が唐恩
 来を殺そうとしたとかいう話など
 も、事実かどうか判断するすべは
 何もないのだ。

こうしたなかで、性急な判断を
 下す前に、少しでも豊富な事実を
 もとに文革の十年を冷静に再構築
 してみるべき作業が、日本と中国
 の未来に関心をもつすべての者に
 求められよう。アメリカの女流研
 究者R・ワイトケによる江青夫人
 からの聞き書きの記録は、この意
 味で一般の資料であるとともに、
 激動の現代史を精いっぱい生き
 た一人の女のすさまじいまでのド
 ラマになっている。

ワイトケが中国革命における女
 性の地位・役割を研究する目的で
 一九七二年に訪中したとき、江青
 は彼女とともに何日かを過ごし、
 生い立ちから現在までを物語っ

た。今ではこの接触自体が江青の
 主要な「罪状」のひとつとされて
 いる。

だが、江青があえてその記録の
 海外での公刊を望んだのは、夫の
 巨大な権威から自立したいという

聞き書きによる一級資料

(ロクサーヌ・ワイトケ著)
 中嶋嶺雄、宇佐美 滋訳

「江青」(上・下)

治的思想的には毛沢東に全面的に
 従おうと欲しつつ、しかも夫から
 自立した女として、自分の領分を
 もち権威をもとうとした。その矛
 盾によってこそ江青は、史上類の
 ない権力の高みへ飛しよう(翔)
 と、そのさ(挫)折とを体験し
 た。

貧しい生い立ちのなかで、そし
 て男たちにつきまとわれつつ、政
 治的迫害に耐えて映画女優の道を
 歩んだ三〇年代上海で江青は、自
 分が犠牲にならないためには権力
 を握るしかないという信念を持っ
 たのだ、とワイトケは書いてい
 る。

文革が、三〇年代文芸のボス
 たち、田漢、周揚らへの批判から
 始まった理由の一半は、江青の私
 的な動機にあった。そしてそれ以
 後、彼女は文化的権力(とりわけ
 報道の)を掌握することで政治の
 最高峰に立ち、同時に映画、演
 劇、音楽から学術方面まで、「プ
 アウスト主義的」万能指導者とし
 て振る舞おうとする。

彼女は毛沢東の権威を一方で利
 用しつつ、心の底から毛沢東の革
 命路線に沿った文芸・情報革命を
 やりたいと欲し、そのことでまず
 まず自家中毒になって生産現場と
 生活者から離れ、観念左翼となっ
 ていく。権力とは何か、社会主義
 とは、そして女の自立とは何か、
 を深刻に考えさせる希有の歴史ド
 ラマである。

(パシフィカ―東京都千代田区
 三崎町一ノ三ノ一二、B6判、上
 巻三九〇頁、下巻二八〇頁、各一
 四〇〇円)

読

書

〈史料・文献紹介〉

〈史料・文献紹介〉

ど論及されていない。これらの諸点は、日本型金融資本としての財閥資本の特質を検討する際に欠くことのできないところであろう。また、日本資本主義のなかでの構造的地位や資本輸出と財閥資本との関連のあり方等の検討も不可欠の課題として残されている。

ともあれ、豊富な学問的蓄積の上に立って、特定資本の分析にとどまらず主要財閥総体を検討し、日本の財閥資本の特質を追求した本書は、われわれ後学にとって広い知識と視野を与えてくれる。(山村睦夫)

ロクサーヌ・ウィトケ
中嶋雄雄・宇佐美滋訳『江 青』

パシフィカ、四六判、上 77年8月、390頁、1400円
下 77年11月、268+16頁、1400円

1972年の夏、中華人民共和国の誕生以来、(おそらく)初めての出来事が始まった。中国共産党の最高指導部内の一人が、自己の経歴を外国人に親しく語りだしたのである。その人とは、当時、中共中央政治局員で中国の文化・芸術さらに思想など「意識形態をふくむ上部構造」全域にわたる最高指導者、権勢並ぶ者なき毛沢東夫人、江青であった。この時、毛沢東の合法的後継者林彪を打倒し、後継者争いの最も有力な一員(少なくともそのグループの最高指導者)となった江青の脳裡には、その夫毛沢東がかつて30年代にエドガー・スノーに会い、「中国の赤い星」として一躍世界にその存在を知られるに至った、あの個人的会見が想起されていたであろう。スノーとの会見では、毛沢東は単に彼個人の革命への歩みだけでなく、いわば中国革命全体の置かれている状況や展望などを、中共党の代表者として全世界にむけて披瀝したのであった。そうして今度は江青夫人が、個人的な回想・革命観の披瀝という形をとりながら、この段階(70年代初め)の中国の政治・文化・思想状況やそれらの展望を語っているのであるが、そこでは当然、己れをかつての毛に比定しつつ中国を代表して世界に語りかけるのだという強烈な意識が働いていたであろうことは、本のしはしによく現われている。

もっともこの点は江青自身だけでなく本書の筆者ウィトケにもみられる意識である。ウィトケは、おそらく今後もありえないであろうようなこの稀有の機会を見事に活かした。ジャーナリストではなく、一歴史研究者としての探究心と誇りが、本書を単なる会見の報告に終らせない分析的思索的なものに仕立てあげようという欲求へと彼女を駆りたてた。歴史と現実、個人と全体、具体的

な諸現象とその裏にひそむ本質的なもの等々、江青という題材を通して中国という巨大な像を解明しようとする著者の意欲はすさまじい。しかし最近のアメリカの中国研究の一般的傾向がそうであったように、ウィトケもまたかの「プロレタリア文化大革命」とそこから上昇してきた「ヘリコプター幹部」の性格や役割について過大な評価を下していたとみられる。そこから会見記そのものの執筆(および会見に臨む著者の心構え)と、それを公表する時点での心情はかなり喰い違った戸惑いが見られる。革命家としてだけでなく、当代中国の最高の文化人・知識人としての、さらにその上に女性としてとつけ加えるべきだろう、江青への共感・信頼が全く崩れ去らないまでも、一抹の哀惜と同情の色合いの濃いものへと傾斜しているのもやむをえない。ウィトケのはたしたスノーにも比定しうべき歴史的貢献が大きければ大きいほど、著者の江青への哀惜の念は高まり、本書はもはや権力の地位には戻りえぬ「故」江青のモニュメント的意味を増すであろう。だが、それは同時に、中国内外の人々によって中国の政治権力・文化・思想・芸術等全般にわたる活きた諸現象の解明の手がかりとなりつづけるだろう。中国人にとっては二度とこのような人物が生まれないうために、また外国人にとってはそうした人物への誤った評価を二度と生み出さないために。(姫田光義)

レーニン
村田陽一・坂井信義訳『民族問題ノート』

大月書店、1977年5月刊、四六判、380頁、3500円

本書はレーニンが民族問題を研究する過程で書き残したノート類や民族問題に関する講演の要旨などから成っている。邦訳『レーニン全集』に収録されている部分もあるが、大部分ははじめて邦訳されるものである。ノート類であるから体系的な民族理論の展開を期待しうものではもちろんないが、それだけに逆に、レーニンの民族問題認識の発展過程を如実に示す箇所を見出すこともできる。二、三の例をあげよう。1913年ぐらいまでのレーニンの民族理論においては、植民地諸民族の問題は十分には視野に入れられていなかったが、第一次大戦を契機とする帝国主義認識の発展にともなって、植民地の問題が帝国主義段階における民族問題として明確に位置づけられるようになった。それをよく示している論文は全集では「革命のプロレタリアートと民族自決権」であるが、本書では、講演「帝国主義と民族自決権」(梗概)

『ア・シ・ア』 1978年7月号

書 評

書 評

ロクサーヌ・ウィトケ 著
中嶋嶺雄／宇佐美滋 共訳

『江 青』

〔上〕 390ページ・1,400円

▶ パシフィカ・

〔下〕 274ページ・1,400円

の一語で片づけたという。若い頃から劇場は「一等席に坐るのが好み」であり、「金持ち向けのレストランで食事をするという趣味」の持ち主であるという趣旨だといふ。一週間六十時間に及んだインタヴューを江青はずっとドレス姿で通した。「私スカート好きよ。」と言ひ、外国人以外オフ・リミットの店「友誼商店」から入手していると平然と語ったのに著者は驚く。江青はまた外国映画のコレクションに夢中になっており、特にお気に入りのグレタ・ガルボ主演の「クリスチナ女王」のフィルムをわざわざ飛行機で北京から会見場の広州まで運ばせて観せたといふ。この映画の終わりが恋と権力の二つを失う女王の物語りであることは偶然であろうか。会見中江青の周囲には常に「ジャスミンと白檀の香り」が重く漂っていたそうである。その江青が「性は最初のうちこそ魅力的ですが、長期に

わたって関心を維持するものは権力です」と語り、別れに際し「私の領域は革命の指導です」と述べて手を差し出したとウィトケは述懐している。

ウィトケは歴史家だから筆体は堅いが、江青の語ったことをそのまま紹介していると思う。全体を通じてことさらに誉めもけなしもしない態度が窺われる。このことと関連し本書には誇張と隠べいがある。それはウィトケの責任ではなく、江青が自分に都合のよいことは大袈裟に語り、都合の悪いことはしゃべらなかつたからである。誇張の好例は一九三七年に延安に来るまでの江青の党活動であり、陰べいの最たるものは同時期の性の遍歴である。

ウィトケ『江青』のこれらの欠陥を補ってくれるのは、ラウ・ルン氏の『江青外伝』（新国民社発行）である。ラウ・ルンとはいかなる人物か説明がないので分か

らない。またこの本は義娘李敏を江青の子供として取扱うなど誤りもある。しかし、貴重な写真を用いての若かりし江青の紹介は、物語り風の筆体と合わせて読者を飽かしめない。江青がウィトケに多くを語ろうとしなかつた、紅衛兵をリモコンしての劉少奇夫人王光明のつるし上げ劇の描写も精緻を極め、内実は江青のすさまじい復しゅう劇であつたと指摘する。本書が親中国の立場の本でないことは明白であるが、保身に焦る四人組がクーデターに訴え、華国鋒を抹殺しようとする終章は迫真力があり、十一全大会の公式報告を補ってくれるのは皮肉である。

今や江青は完全に過去の人物となった。しかし、現代中国の研究から江青を省くわけにはいかない。最初にして最後となつた江青インタヴュー、ウィトケ著『江青』はたとえ欠陥があろうとも貴重な文献である。

『江 青』(上・下)

ロクサーヌ・ウィトケ著
中嶋 嶺雄・宇佐美滋訳

本書はすでに『タイム』誌にその要約が掲載され、わが国でも『朝日新聞』・『週刊朝日』がその一部を紹介して話題をよんだロクサーヌ・ウィトケ著『江青』の全訳である。

今日われわれにとって、中国の政治的情况はきわめて不透明なものである。しかし、革命のベールにつつまれたその奥深い政治の世界においては、まさに惨絶なる闘いのドラマと、赤裸々な人間模様が展開されていることは事実であろう。故毛沢東の最愛の妻として革命の地・延安に咲いた一輪の華、江青が文化大革命によって一躍政治の表舞台に登場したかと思うと、今度は一転して最大限の屈辱と汚名を浴びながら闘いの渦のなかに消えていく。そうした食うか食われるかの闘争の過程を「一人の女として、革命家として精いっぱい背のびして生きようとした」江青女史にとって本書はまさに自己主張の書であり、また、政変後の今となつては逆に弁明の書でもある。

さらに本書は、中国革命のいまだ知られざる部分について、江青自身の口から初めて明らかにされた箇所も含み、きわめて高い資料的価値を有している。ただし読者としては、アメリカの女流中国研究者である筆者の禁欲的記録作業の試みとは裏腹

に、筆者自身の江青への強度の共感が文章のいたるところ散見されるのを痛感されるかもしれない。そうした問題をも含めた本書の意味については、翻訳にあたつた中嶋嶺雄氏が見事な解説を加えていっそう興味深いものにしてている。

ともあれ本書は、江青のような「悲劇」のヒロインを生み出す中国の政治風土の真相を明瞭ともに描き出した貴重な証言の記録であり、たんに中国研究者のみならず、より多くの人びとに読まれてよい本のひとつといえるだろう。

定 価 上・下巻とも一四〇〇円

発行所 パシフィカ

千代田区三崎町一―三―一二

(二九五) 六二三一



このへんから始めに「殺人大団圓」の政見」からの脱却に、一歩を

千九百七十五年春、曾野綾子が中国に行った時、彼女は度々とな

「天の半は女が支える」という言葉を聞かされた。それ

は実際の状況としては、生産の場において男女の差によって労働の価値を測るべきではない、と

か、女性もまた、偉大な社会を建設するために、男性と同じ献身が必要なのだ、といったことを強調するために語られたという。

しかし帰国してから、このことを彼女と話しあっているうちに、私はこのこと、二つの方向が暗示されているような気がした。

一つは先進国における同じ、ウィマンリブである。古来、中国の女性は家庭内では隠然たる力ではあったが、社会的にはゼロに等しかった。しかし孫文の革命運動以来、命をかけて闘争の場に進出する女子大生や、朱姉妹に代表されるような、中国人独特の人的な

中国を感じる

「江青」を読んで

三浦 朱門



殊に其の革命以後、庶民の女性も生産や政治闘争の場に活躍してきた。毛沢東、周恩来、劉少奇、林彪らの夫人が、名のみにせよ、政治局員の中に名を連ねるなら、自分らも、男と肩を並べてしかるべきだ、と庶民の女たちが思っ

た。天という言葉には中国の伝統的な意味がある。もし毛沢東が天向によって中国の解放者たるべくうまれたならば、そして現代の中国が男女が平等に新国家建設の重なるものとなれば、毛

沢東主席の名代として、また、その死後彼と共に天命を受けた同志として、彼女は使命を遂行する義務があるかもしれない。

私は江青の野心がなく、自負と書いた。それは彼女が自分の野心を認めるほどにきびしい人間ではないと思つたのである。俳優がへたに内省的になれば、エロシ

の是非は別として、これにかかわる必然がある。しかし、彼女は農村の人民裁判に参加する必要が果たしてあったものだろうか。いすれにせよ、こういふことを、私のうらみをほらす、と意識して実行できる人は余程の人物である。

しかし彼女が、これらのことを、毛沢東精神の実現のためにやると信じているのである。つまり、主観的には往返してなく正義を行つたのであり、彼女の行動は野心でなく使命なのだ。

いすれにせよ、毛沢東なき後、自分が夫の後をういて、中国八億の人民の導き手となることは、数民出身の女性であり、数ある男性の役員たちから長年にわたって無視されてきた彼女にとって、個人的勝利、彼らへの復讐であるのみならず、彼女と境遇を同じくする何億の女性、何億の結核、何億の若さと同様にしないといった姿勢に、先進国のリブ運動家に通ずるものがある。

「一九五一年に、私（江青）が土地改革の第二期の工作のために別の地方に行つたときのこと

だが、男たちは茶館で賭博にふけり、ぶらぶらと暇つぶしをして、いさゝかの仕事を婦人に押しつけていました。彼らは、家に帰る前に呼びに来た婦人を見さかいなのしり、たまたましました。それでも婦人たちは耐えこたへてきました。（中略）（今で

が、男たちは茶館で賭博にふけり、ぶらぶらと暇つぶしをして、いさゝかの仕事を婦人に押しつけていました。彼らは、家に帰る前に呼びに来た婦人を見さかいなのしり、たまたましました。それでも婦人たちは耐えこたへてきました。（中略）（今で

が、男たちは茶館で賭博にふけり、ぶらぶらと暇つぶしをして、いさゝかの仕事を婦人に押しつけていました。彼らは、家に帰る前に呼びに来た婦人を見さかいなのしり、たまたましました。それでも婦人たちは耐えこたへてきました。（中略）（今で

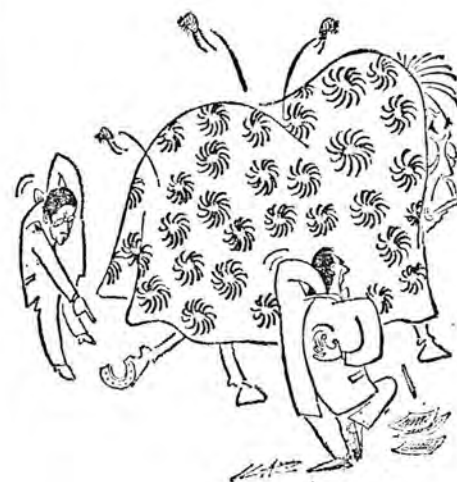
が、男たちは茶館で賭博にふけり、ぶらぶらと暇つぶしをして、いさゝかの仕事を婦人に押しつけていました。彼らは、家に帰る前に呼びに来た婦人を見さかいなのしり、たまたましました。それでも婦人たちは耐えこたへてきました。（中略）（今で

が、男たちは茶館で賭博にふけり、ぶらぶらと暇つぶしをして、いさゝかの仕事を婦人に押しつけていました。彼らは、家に帰る前に呼びに来た婦人を見さかいなのしり、たまたましました。それでも婦人たちは耐えこたへてきました。（中略）（今で

が、男たちは茶館で賭博にふけり、ぶらぶらと暇つぶしをして、いさゝかの仕事を婦人に押しつけていました。彼らは、家に帰る前に呼びに来た婦人を見さかいなのしり、たまたましました。それでも婦人たちは耐えこたへてきました。（中略）（今で

子猫登場

クロイワ・カズ



出 登 猫 子

馬脚も出たけどノミもとび出した!!

あるいは楊貴妃、クレオパトラ、則天武后のような歴史的な女性性と自分を重ねても当然である。事実、彼女は歴史的な女性性である。

ただ、それは彼女の天命に必要ではない。シュテファン・ツパイクは、セント・ヘレナのナポレオンや、膨力を失ったベートーヴェンの悲劇を、マリイ・アントワネットの悲劇と対比している。一方は才能ある人間が、その場を奪われた悲劇であり、他方は歴史的な役割りを果たさなければならなかった凡人の悲劇である。

文化大革命での彼女の活躍と、夫の死の前後に訪れた、その劇的な失脚はナポレオンの栄光と屈辱ではなく、マリイ・アントワネットの審判と悲劇に通ずるものである。たとえ将来彼女がその名声が復活することがあるにしても、それは何らかの勢力がために政策である。革命家として偉大であり、政治家として無能だった毛沢東という人物の、マイナスイメージとして、彼女の存在と活動が歴史的には残るのではないかと、私は考えている。

「野心は大きく、陰謀ははなはだし、詭計は狂。その罪は万死にあたい……」という詩を作る所に、今日の中国のどうしようもなきが感じられるのである。（作意）

「江青」上・下

ロクサーヌ・ウィトケ著

中編 蘭蔵共訳

宇佐美 数典訳

各一、四〇〇円